



『しっかり者の童話』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メーリケ, E, 岩元, 修 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00010047">https://doi.org/10.24729/00010047</a>

# し っ かり 者 の 童 話

E. メーリケ  
岩元 修 訳

しっかり者の話をしよう、お聞きなさい。

——彼を生んだのは、石の蛙だという。

シュヴァルト森の山にある大きな岩がそう呼ばれ、

ずんぐりと幅広く、突起がたくさんあって、醜い蛙にそっくりだ。

その中にしっかり者は横たわり、ノアの洪水の日々の後まで眠っていた。

実は、彼の父親は森の蛮人で、意地悪く残忍なことをして、

すべての神々や妖精たちの怒りを怖れていた。

息子は彼に全く似ていなかったが、いっそう醜かった。

姿は怪物のように大きく、背中も肩幅も広がった。

以前は、無作法にも裸で歩いていたが、人間の知恵が備ってからは、

ごわごわの灰色毛皮の上衣を着、もの凄い長靴をはいて歩いた。

頭はぞっとするような髪の毛に覆われ、ひげは逆立っていた。

(イーゲルスロッフの床屋が、こっそりと彼の洞窟を訪れ、

まるで慎重な庭師のように働いて、

とてつもなく大きな鋏で、髪の毛の繁みを刈りとったという。)

彼のすることは全く意味もなく、愚かなむら気に満ちていた。

夜の間、山から降りてくる時は、

ただ一人語りをするだけで、しばしば心に恨みを持ったみたいで、

道しるべや里標を、きまった歩幅で押しつぶしていった。

(というのも、それらを彼は、わけもなく、死ぬほど嫌っていたのだ。)

また、冬になって、収穫のすんだ平地に降りてきた時、  
彼は背丈いっぱい伸びをして、立ち上がり、  
自分の影に満足して、山を揺振るような笑い声をたてることもよくあった。

さて、ある日の正午ごろ、彼が住処で横になり、  
大好物の汁の多い大根と、約束したように百姓が  
運んでくるベーコンを食べて、腹ごなしをしていると、  
突然、洞窟のまわりの壁が、喜ばしい光に満たされ、  
ローレグリンが目の前に立っていた。彼は神々の愛すべき寵児で、  
至福の神々のために、お道化を命ぜられていた。  
(普通、彼はオルプリート島でしか見られない、他の土地を避けるので。)  
このヴァイラの腕白な息子は、額に、  
青い鈴と翁草で編み上げた道化の冠を巻いていた。  
今、彼は、休んでいる男に親切ごかしに話しかけた。  
「しっかり者のズッケルボルストよ、ごきげん如何。  
神々が僕を遣わされ、おまえにお伝えになることをおとなしくお聞き。  
——神々は、おまえの知恵とその善良な心ばえと、  
おまえの生まれを尊んでおられる。おまえの父親は半神だった。  
そして神々は、つねに、おまえも半神でいられるようにして下さった。  
しかし、ある点でおまえは神々に不実だ。それを今、聞かせてやろう。  
そのままて寛いでいてよろしい。——僕は、つつましくも、  
おまえの立派な長靴の踵のふちに坐ろう、  
全く巖のようにそそり立ち、重くて僕には運べそうもない靴だ。

さて、ゼラハダンとは、大蛙との間におまえをもうけ、  
自分の不死の力を、蛙の肉体の中にとじ込めた。  
その時、蛙はまだ生きていたのだが、受胎してまもなく、  
石に変えられてしまい、父親も死んでしまった。

それでも、おまえは、母胎に九か月以上眠り、  
そして十か月目、地上に洪水が起こった。  
四十日の間、昼も夜も、大雨が降って暴れ、  
汚れた世界を浸し、人も獣も溺れ死んだ。  
ただ一面の海に、大地も山も谷も覆われ、  
雲のただよう峰さえも隠されてしまった。  
しかし、おまえは岩の中に安らかに包まれ、  
まるで牡蠣のように、あるいは海の精華、貴い真珠のように、  
固くとざされた殻の中でやすんでいた。  
神々は、おまえの眠りを、気高いまなざしで祝福なかり、  
万象の生まれた創造の秘密を見せて下さった。  
まずは、うごめく力を孕んだ地球が、星たちとともに、  
暗黒の無の中から浮かび上がるさまを。  
そして草や葉が、はじめて大地に緑ぐむようす。  
大地の胸深くはぐくまれた乳から、  
美しい肉のかたちが生まれ、その中に霊が住み、  
動物と人類が、ともに誕生するすがた。  
さらに、おまえの夢は、人々の遠い未来のことまでも歌った、  
王冠の遷りゆく運命と、王たちの数々の行為を。  
すなわちおまえは、永遠にまします神々の隠れたる意志を見たのだ。  
神々が、このようなことをお慈みになったのは、おまえが立派な教師や  
予言者になって、今一度ひとびとに真実を予言することを願われたからだ。  
それは、地上に生きて彷徨う人間に伝えよ、というのではない。  
知ったとて、彼らには殆んど役にたたぬ。僕の知っているのは、  
地下の影の世界に住む霊たちのことだ。そこに悲しげに腰をおろし、  
生気をもたらす言葉も知らず、永遠に黙したまま、  
高邁な摂理を探っている古代の賢者、英雄たち、彼らに伝えよというのだ。  
しかし、神々の御期待は空しかった。おまえは少しも、

崇高な使命を考えようとはしなかったからだ。じいさん！ おまえが、  
これまでどんなことをしてきたか言わせてもらおう。

おまえは、半神でも神霊をうけた者でもなく、一匹の豚に見えるよ。

おまえはいつも忌わしい大根を欲しがり、また災いをたくらんだ。

夜には、膝を越すような長靴をはいて河にはいってゆき、

筏の結びも解いて材木をはるか陸地の奥まで投げ込んで、

うやまうべき筏師たちを侮辱した。

ばかばかしくも、一日中、野山を走り回って、

雄猪のうなり声をまねては、雌をおびきよせ、

さて雌猪が藪を走り抜けてくると、その耳をつかんで、

暴れるのをしめつけては、残忍にも、その悲鳴を楽しんでいる。

ほら、僕たちはすっかり知っている。神々に見えないものはないのだ。

しかし、もはや神々は目に見ては下さらぬ。後悔することになるぞ。

そのこわばった性根を、すこしは曲げてみる！

おまえの知識を探し集めるがいい。そのおつむの煤けた部屋に

光を当てて、おまえに啓示されたあれやこの全てを

思い出すのだ。そして筆をとり、丹精こめて

それを本に著し、永久に残すのだ。さらには、

冥界に下って、それを死者たちに講釈せよ。きっとおまえは、

冥界へ至る道もその入口も知っているはずだ。別に驚きもしないだろう、

というのも、おまえは、頼りになる長靴をはいたしっかり者だから。

じいさん、これで僕は帰るよ。さよなら、また会おう。」

いたずら好きの神はこう言って、老人を一人にした。

今、老人は狼狽し、ほとんど頭が働かなかった。

ようやく彼は、低くつぶやき始め、ついには恥ずべきことを

ののしった、神をも怖れぬ、書き写すにたえぬ言葉を。

しかし憤怒と激情がおさまると、彼はうちしずみ、

ものを言わなくなった。今や、精霊が彼に、  
全能なる天上のものには抗わずにむしろ従え、と促したからである。  
そしてすぐさま、彼の思考は、ずうっと  
一千年もの垢を掘り返してゆき、ついには、  
いまだ胎児のままの彼自身が、創造の息吹くさまを見ている所まで達した。  
(というのも、あの神がそう言ったし、神は嘘をつかないだろうから。)  
しかし浮かんでくるのは、夜のようにうす暗いものばかりだった。  
神が彼の高揚した心にかきたてた、奇跡の思想の重みを支えうるような  
杭も鉤も、手さぐりしてみたところで、  
どこにも打ち込まれているようすはなかった。  
こうして彼の努力は得るものがなく、魔法使のように汗をかいただけだった。  
ところが幸いにも、やっと次のような考えが、彼の脳裡を走った。  
誰にも書けない偉大な書物を、自分が初めて書くのだ、  
この自らの手によって、未来の真理を含んだ本を。  
彼がこれを果たしゆくさまを、ああミューズの神、私をして語らしめ給え。

とっくに日は沈んでいた。そして夜が地上を支配して  
四時間も過ぎたころ、しっかり者は寢床を出て、  
頭に丸い帽子をのせ、旅の杖をつかんで、  
ほら穴をあとにした。彼は、ゆったりと山の上の方へ登ってゆき、  
いつものように、一人言をつぶやいていた。

さて、今は、月がもう、赤松の森にそって明るく  
清らかに輝きながら、空高く昇ってあたり一帯を照らし、  
ズッケルボルストが到着したイーゲルスロッホの峰も光っていた。  
夜警が十二時を叫ぶか叫ばぬうちに、  
村のいたるところ静まりかえり、  
明り一つ見えなくなった、陽気な紡ぎ女の仕事部屋にも、

織工のさびしげな椅子にも、旅館にも。

男も女も床につき、一日の疲れを、眠りで癒している。

今、ズッケルボルストは、そっと、一番手前の穀物倉の前まで歩いてゆき、二枚の扉の高さと幅を、穏やかなまなざしで静かに測った。(扉はそんなに小さなものではなかったが、彼の体の方が大きかった、彼は巨人だったから。)

錠前と貫木を、彼はじっと見つめてから、指で鉤をつまみ取って、入口を開き、

やすやすと扉を蝶番からはずして、壁の上に重ねた。

すぐさま今度は、隣の穀物倉に目を向け、同じ仕事をしようと近づいて、頑丈な扉をうばいとり、壁にもたせた先ほどの扉の上に重ね、そして同じことを、小路にそって次々とくり返して、おしまいには、五軒目、六軒目の百姓の仕事場にまで同様に風を通した。

手に入れた扉の数を最後に勘定してみると、ちょうど十二枚あった。

残っている仕事は、背の蝶番の穴を、きれいな紐で結ぶことだった。そうしたら一冊の帳面ができて上がるだろう、すばらしい帳面が。しかし、それは家ですべき仕事だった。

こうして彼は材料を腕にはきんで走り去った。

百姓たちは鼾をかいていたが、そうするうちに、一人の男が眠りからゆすぶり起こされ、どしんどしんと遠のいてゆく足音を聞いた。

彼がさっと寝床からとび降りて、低い窓のひき戸を急いで開き、外のようすをうかがうと、驚いたことに、

月に照らされた村中の穀物倉が、まっ黒な口をぽっかりとあけている。彼はおびえながらも皮のズボンをはいて(その時、左足を右側につっ込んだので、足がもつれた)、

妻を揺り起こし、興奮して彼女に言った、

「ケーテ！ 起きるんだ！ しっかり者だよ。——俺には聞こえたんだ——  
奴は村で悪魔のようなことをしてかして、穀物倉を荒らしたんだ。  
俺のかわりに家や家畜小屋を調べろ！ 俺は村長のところへ走る。」  
こうして彼は家をとび出した。しかし彼はまず、  
自分で中庭の家畜小屋に目をやって、家畜がいるかどうか確かめた。  
しかし一匹も欠けてはいなかった。斑牛がモーとないた、  
餌の時間だと思ったらしい。さてこの男は通りにとび出し、  
途中、警官の家の雨戸をたたいて、次のように叫んだ、  
「ミヒェル、出て来てくれ！ ラッパをならせ！  
しっかり者が村に降りてきて、倉を破り、荒らし回ったんだ。」  
こんなことを言いつつも、彼はもう走り出していて、  
村長を起こし、市長を起こし、その他に自分の友達を起こした。  
またたく間に、通りはにぎやかになり、男たちは仰天して  
呪いの言葉を吐き、女たちは声をそろえて嘆きどきした。  
誰もが自分の財産を調べたが、大した被害もないので、  
すこしは慰められた。しかし激怒した者たちは、見当はずれにも、  
夜警に襲いかかって叫んだ、「この寝惚け野郎！  
全くの役立たずめ！」そして、ごつごつした拳を固めて  
彼をなぐろうとしたが、ようやくのことで気を落ちつけた。  
最後には、みんな散らばって休みに戻ったが、  
村長は、あの蛮人がいま一度やって来る場合に備えて、見張りを立てた。

ズッケルボルストは、もうその間に、洞窟にたどり着いていた。  
この穴は、入口の所から幅も広く、高さもあって、岩の穹窿をなしていた。  
そして香りのきつい巨大な松の木が、前をうす暗くおおっていた。  
ここで彼は大きな扉を降ろし、  
自分も横になって、黄金の眠りを楽しんだ。



しかし、太陽が木々のすき間からのぞくや否や、  
すぐさま彼は、扉をとじ合わせる仕事にとりかかった。  
きれいな縄もすでに用意してあった、もちろん盗んできたものだが。  
彼は注意深く見つめてページを重ねてゆき、前と後には、  
表紙として、一番美しいものをつないだ。（それらは村長の扉で、  
十字模様に、赤い縁取りが見事にうちつけられていた。）  
さて、立派な作品を見ていると、突然、  
靈感が生まれ、彼は地面から大きな炭をとり上げ、  
開いた本の前に腰をおろして、力いっぱい、  
まっすぐな線やゆがんだ線を引っ搔き、まねようのない言葉を書いては、  
満足げに力強いなり声をあげた。  
一日半も彼はこの仕事にとりくみ、最後のページが埋まるまでは、  
ものを食べたり水を飲んだりする時間もほとんど取らなかった。  
終わりのところで、彼はついに子供の頭みたいに大きなピリオドをうった。  
そして深く息をして立ち上がりながら、本をパタンと閉じた。

さて、たっぷりと御馳走を食べて、鋭気を養ってから、  
彼は帽子と杖をもち、旅立った。さびしげな道を、たえず  
北に向かって走った。というのも、それは死者の国に通じる道だった。  
七日目の朝には、彼はすでに、うす暗い門についた。  
階が、ちょうど空に出来ないの縞をえがいて、  
生ある人々に、昼の光の到来を告げていたが、  
彼は恐れることもなく、岩の会堂へ降りていった。  
しかし、なおも二十四時間、彼は地中の曲がりくねった管を  
進み続けた。ローレグリンがこっそりと案内してくれていたのだ。  
そしてついに、彼は影たちを見た、気体のように漂いながら  
暗い空間に住む悪人と善人の影を。

前の玄関には、下層階級の中の塵や芥のような人々が  
集まっていた、嘘つき商人、女衞、娼婦、  
そして貪欲な詩人と、数え切れぬほどの賤民。  
しゃべるのに慣れ、揶揄したり売買したりするのを業としていた彼らは、  
声をはり上げようと骨折っていたが、出る声は空しくも、ささやきだった。  
というも、明澄に響く言葉は、死者には与えられていなかったのだ。  
だから、激しい身振りで合図するしかなく、  
まるで年の市の群集のように、押したり引いたりし合っていた。  
さらに奥をのぞくと、名高い霊たちがみとめられた、  
永遠の月桂冠を戴いた王侯、英雄、歌人たち。  
彼らの挙措はもの静かで、仲間といるものもあれば、  
一人坐っているものもいた。そしてあたりに散らばったグループを、  
丘、岩、藪や、糸杉の黒い壁がくぎっていた。

入口のところに、世界創造の本を脇にはさんだしっかり者の  
丈高い姿がによっきりと現れるやいなや、  
なんと、門口の影どもは、死ぬほどの驚きにとらえられた。  
彼らは皆、ばらばらに散った、ちょうど村の遊び場にいる子供らが、  
雄牛が放れたぞ、と聞かされて、散り散りになるように。  
しかし、しっかり者は、前に進みながら、まわりの人々に優しく  
会釈したので、皆は近づいて来て立ちどまり、あぐりと彼を眺めた。

ズッケルボルストは、いよいよ、その巨大な原稿を  
低い丘にもたせかけ、自分はその丘に対座して、  
苔むした岩の上に席をとろうとした。  
しかしまず、帽子と杖をおもむろに脇に置いて、  
幅広い手で、額のしたたる汗をぬぐいとり、  
咳払いをした。すると会堂は、耳をつんざくような反響に満たされた。

それから彼は腰をおろし、ご立派な講義を始めた。  
まずは、うごめく力を孕んだ地球が、星たちとともに、  
暗黒の無の中から浮かび上がるさまを。  
そして、草や菜が、はじめて大地に緑ぐむようす。  
大地の胸深くはぐくまれた乳から、  
美しい肉のかたちが生まれ、その中に霊が住み、  
動物と人類が、ともに誕生するすがた。  
このようなことを、最高の悟性に従い、守護霊の啓発する限りに、  
老人は落ちついて講義し、一方、影たちは静かに傾聴した。  
ところが、冥界の別の領域から、つのの生えた黒い化け物、  
悪魔が、あつかましくも闖入していた、  
得意先や気晴らしを求めるときよくするように、  
好奇心をふくらませ、陰険なようすをして。  
彼は、話し手の背後に立って、嘲笑し、  
しかめっ面をつくったり、舌を出したり、猿のように  
とんぼ返りをうっては、聴衆をひきつけて笑わそうとした。  
しっかり者は、それに気づいてはいたが、別に何もせず、  
話を続けて、気高い平静さのうちに耐え忍んだ。  
一方、悪魔のいたずらは、ますます向こう見ずになり、  
しまいには、自分の重くて長い尻尾を、老人の上着の  
後ろポケットにそっと入れた。冷たくて、老人はぞっとした。  
突然、しっかり者はうしろに手を伸ばし、力強く  
右手で尻尾をつかんで、根もとからぐいと引っぱった。  
すると、尻尾はポキンと折れた——恐ろしい光景だ。  
悪者は、大きなうなり声を発し、前足で傷口をおさえて、激しい痛みに  
独楽のようにきりきり舞いしなながら、わめいたり、ひいひい泣いたりした。  
傷口からは、くすぶった瀝青のような血が溢れ出た。  
そして彼は、矢のように素早く脇に退いて、

驚いた霊たちがさっと身をひいてできた道を、恥ずかしくも逃げていった。  
彼は、自分の住処である地獄に走っていったのだ。  
そして、かなり遠く離れても、逃亡者の悲鳴は聞こえていた。

さて、まわりの群集は、恐怖にとらわれたまま突っ立ち、  
畏敬に満ちたまなざしを、しっかり者にむけていた。  
しっかり者は、重い尻尾を、両手に持ったまま揺振っていた。  
その尻尾には、まだ時々、けいれん的な痛みが、かすかに走っていた。  
彼は、物思わしげに尻尾を見つめながら、予言者めいた言葉を発した。

「しっかり者は、悪魔を何度こらしめるか？  
一度目は今日、その起こるところを、みんなが恰度まのあたりにした。  
そして、二度目、三度目には完了するだろう。  
三たび、しっかり者は、悪魔の尻尾をひきちぎるのだ。  
なるほど、悪魔に尻尾は新しく生えてこよう、しかし元通りにはならぬ。  
それは三分の一ずつ短くなってゆき、ついには枯れてしまう。  
それに合せて、気力も体力も衰えて、奴は、  
年をとり毫碌して、皆に蔑まれる乞食となりはてるだろう。  
その時、冥界も地上も、祝祭の日となるのだ。  
そしてまた、しっかり者は、神々の愛すべき同輩となるであろう。」

こう語ってから、さて、彼は尻尾を本の間に記念として挟んだ、  
ていねいにも、上の方からは毛の総がちょうど見えるように。  
というのも、彼には、目下、これ以上講義を続ける気はなかったからで、  
さあこれまで、というように、大きな作品の表紙をパタンと閉じ、  
それを脇にはさんで、帽子と杖を持って、別れを告げた。

民衆すべてが、この立派な男が門の所ですっかり見えなくなるまで、

限りない賛同の拍手を送り続けた。

そして、いまだ、ざわめきは止まず、喜びの興奮がうずまいた。

ところで、ローレグリンの神さまは、

全ての光景をひそかに観察し、耳傾けていた、

蟬に化けて、黒柳の垂れた枝の上でゆらゆら揺れながら、

そして今、彼はこの場を去り、神々のもとへ昇って行った、

しっかり者の勲功を忠実に報告して、

天上の食事に、快い笑いの興をそえようと。

#### テ キ ス ト

Eduard Mörike: *Märchen vom sichern Mann.*

In: *Sämtliche Werke in zwei Bänden.* München 1968.